



森林と人を 活かす知恵 164

あと十年もしたら、こんな話するもんもおらん

― 竹屋だった古民家で考えたこと。

岐阜県立森林文化アカデミー 講師 ● 谷口 吾郎



「あと十年もしたら、こんな話するもんも、おらんようになるわなあ。」
家の裏山にある稲荷神社の小さなお祭りで、八十歳を超える地域の方が笑いながらそう話してくれた。
その方によれば、このあたり一帯は

昔、よく手入れされた竹林が広がっていたという。

「それこそ、お宅のところが竹屋さんやったからね。」

私は美濃市に築百年を超える町家を譲り受け、改修して暮らし始めた。この家がかつて竹屋を営み、地域の「花みこし」で使う竹材も担っていたこと、その前は木材も扱い、さらにさかのぼれば長良川で木材や竹を運ぶ船頭だったことも、地域で出会った方々との会話の中で少しずつ教えていただいた。

一軒の家の歴史は、気がつけば美濃町の歴史そのものだった。

こうした話のほとんどが資料には残っていない。竹屋という仕事が地域の風景をどうつくり、人々がどんな暮らしを営んできたのか。それらは地域で生きてきた人の記憶とその面影の中にだけ残っている。

だからこそ、「あと十年もしたら忘れられる」という言葉が重く響いた。私は古い町並みや古民家が好きだ。また地域のお年寄りの話を聞く時間が好きで、許されるならずっと聞きたい。

話を聞いていると、一つの家が町へ、

町が川へ、川が山へとつながり、それまで点だったものが一本の線になっていく。そのつながり直されていく物語に立ち会えることが、たまらなく面白い。

一方で、私は文章を書くことがあまり得意ではない。

だから、貴重なお話を聞いても、その場の感動だけを持ち帰ってしまうことが少なくなかった。何度も「書き残しておけばよかった」と後悔してきた。

それでも、だからといって諦めたことはない。最近A1による文字起こしなど、話し言葉をそのまま記録できる技術が身近になってきた。文章を書くことが得意でなくても、地域の方々の語りを未来へ手渡すことはできるかもしれない。新しい技術の力も借りながら、この町に残る物語を一つでも多く書き留めていきたいと思います。

森林文化というと、木材利用や林業技術を思い浮かべる人が多い。しかし古民家で暮らし始めた私は、その見方が少し変わった。

竹屋という仕事が竹林を守り、船頭が山の木を川で運び、人々の暮らしが町並みを育んできた。その営みは建物



だけでなく、人の記憶や語りの中にも息づいている。

もちろん、古民家をそのまま残せばよいとは思わない。我が家も耐震補強や断熱改修を施し、現代の暮らしに合せて手を入れた。

しかし、建物を新しくすること、その土地に積み重ねられた物語まで失うことは違う。

建物や森は残すことができる。けれど、人の語りは、耳を澄ませる人がいなければ消えてしまう。

森林文化とは、木や建物だけではなく、そこに生きてきた人々の営みや記憶、地域に宿る物語を受け渡していくことでもあるのだと、竹屋だった古民家が私に教えてくれた。